

## 同和問題

同和問題とは、歴史的・社会的に形成されてきた人々の差別意識が今なお根強く残っていることで、特定の地域出身であることや、そこに住んでいることを理由に、結婚や就職、日常生活のさまざまな場面で差別するという重大な人権問題です。差別に関わることで、自分が差別を受けることは避けたいという意識が、差別の現実を作り上げている一因になっています。

しかし同和問題とは、差別される人の問題ではなく、あくまでも差別する人の問題です。私たちは、誰もが生まれた場所や親、家を選ぶことはできません。また、どこで暮らしているかによって、その人の値打ちが決まるわけでもありません。

自分だけでなく、自分の家族や友人など、人と人との出会いによって生まれたつながりは、かけがえのない大切な財産です。差別はこうした人と人との温かいつながりを切っていくだけでなく、差別を受ける人に耐え難い苦痛を与え、人間の尊厳を傷つけ、踏みにじる行為であり、人の命を奪うこともあるのです。

差別は人がつくったものです。それならば、差別をなくせるのも、差別をなくしていくのも人なのです。同和問題を



解決するには、同和問題を正しく理解し、自らが問題意識を持って考え行動することが必要です。

「自分は差別しないから」「自分には関係ないから」といった自分の責任ではないとする考え方は、差別を助長してしまいます。

また、間違った知識や情報による思い込みが知らず知らずのうちに刷り込まれ、差別意識や偏見につながる可能性があります。人が人として尊重され、誰もが安心して生きられる社会にしていくなめには、差別を見抜き、差別を許さないといった鋭い人権感覚を養い、学び続けていくことが大切なのではないでしょうか。

## 女性と子どもの人権

昨年12月10日、ノーベル平和賞の授賞式がノルウェーの首都オスロで開催され、女性の教育を受ける権利を訴え続けている17歳の少女、マララ・ユサフザイさんが史上最年少で受賞しました。

マララさんは、2009年から女性が教育を受ける権利を訴え続け、2012年に女性への教育を認めない反政府武装勢力に襲撃され意識不明の重傷を負いましたが、奇跡的に一命を取り留めました。その後、国連で演説を行い「一人の子ども、一人の教師、一冊の本、そして一本のペン、それで世界を変えられます。教育こそが、ただ一つの解決策なのです」と呼び掛け、女子教育の権利を訴え続けました。

今回のノーベル平和賞受賞を受け、マララさんは受賞演説で、子どもたちが教育を受ける権利の重要性についてこう話しました。

親愛なる兄弟姉妹の皆さん。いわゆる大人の世界であれば理解されているのかもしれませんが、私たち子どもには分かりません。なぜ「強い」といわれる国々は、戦争を生み出す力がとてもあるのに、平和をもたらすことにかけては弱いのでしょうか。なぜ、銃を与えることはとても簡単なのに、本を与えることはとても難しいのでしょうか。



なぜ戦車を作るとはとても簡単で、学校を建てることはとても難しいのでしょうか。21世紀の現代に生きる私たちは、不可能なことはないと信じています。月にだって行けるし、火星にもそのうち着陸するかもしれない。ですから、この21世紀に、誰もが良質な教育を受けられるという夢もかなうのだと、決意を持たなければならないのです。教育を奪われた子どもを目にするのが最後となるよう、行動に移すときです。教室が空っぽのままであり続けるのは、もう終わりにしましょう。

マララさんのノーベル平和賞受賞の演説は、より良い未来を築くためのスタートとなりました。